

## II B-23

ネコ上頸神経節切除による鼻腺の変化

渡辺建介、原田宏美

(東京医科歯科大、耳鼻咽喉科)

気管上皮や唾液腺では $\beta$ -刺激剤の投与によりペルオキシダーゼの分泌が亢進することが知られている。鼻腺においては鼻アレルギー患者ではペルオキシダーゼ分泌が抑制されているがステロイド治療後では正常に復することを以前に我々は報告した。鼻に分泌する交感神経の大部分は上頸神経節由来のものと考えられるので、これを切除し経時的に鼻腺の変化を電子顕微鏡で観察した。

(結果)正常ネコ鼻腺ではペルオキシダーゼ活性は核周囲、r-ER、ゴルジ装置、分泌顆粒に認められた。上頸神経節切除後1日では分泌顆粒の増加を認めたがその他の変化は認められなかった。7日後ではr-ERが拡大しその中に強いペルオキシダーゼ活性を認めたが活性を認めない顆粒が多数観察された。ゴルジ装置には活性がほとんど認められなかった。30日後での変化は7日後の変化と大差なかったが3ヶ月後ではペルオキシダーゼはr-ERにも顆粒内にも認められなかった。(考察)上頸神経節の切除によりゴルジ装置でのペルオキシダーゼの顆粒内輸送が抑制されるものと考えられる。

## II B-24

ラット新生仔の喉頭腺、気管腺におけるペルオキシダーゼ活性の出現

坂井 譲、上田忠司、平井圭一  
(金沢医大・第1解剖)

新生仔ラットの喉頭腺及び気管腺の発達に伴うペルオキシダーゼ活性(PO活性)の出現について組織化学的に検索した。

SPF-Wistar系ラット新生仔の気管を摘出し、冷1%paraformaldehyde-1.25%glutaraldehyde(0.1M カコジル酸緩衝液、pH 7.4)で30分凍結固定した。凍結切片を37°C、60分DAB反応液(0.5mg/ml 3,3'-diaminobenzidine・4HCl、0.002% $H_2O_2$ 、2mM KCN、0.1Mトリス塩酸緩衝液、pH7.6)に浸漬しPO活性を検出した。

口腔下腔の喉頭腺では、6日目に未熟な前腺房細胞の少数にPO活性が出現した。7日目にはPO陽性細胞数が増加し、輪状軟骨上縁及び下縁の粘膜下組織に広がりを見せた。気管腺は、生後5日目頃から各気管軟骨間の粘膜下組織に気管上皮の陥入と腺構造の形成が認められたが、生後12日目、前腺房細胞の極く一部にPO活性が出現するようになり、14日目には多くのPO陽性細胞を観察するようになった。導管付両腺ともPO陰性であった。以上の結果は、ラット喉頭腺と気管腺は出生後発達するものの、PO活性の出現時期に差があることを示している。